

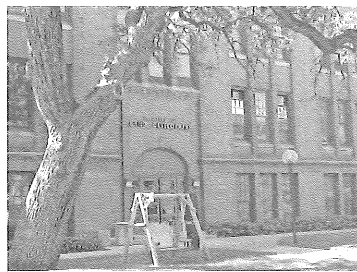
〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(26)〉

アメリカ合衆国の

保育事情・保育思想 (1)

― ミネソタ大学内にある保育の場 ―

塩崎 美穂



▲写真1：ミネソタ大学の子ども発達研究所

二〇〇七年九月、アメリカ合衆国（以下、アメリカ）屈指の総合大学として名高いミネソタ大学を訪れました。雄大なミシシッピ川をはさんで広がっている緑あふれるキャンパスには、医学、法学、教養、生物、農・食物など、十五以上の学部（college）や研究所（institute）が建ち並んでいます。

ミネソタ大学のラボ・スクール

ミネソタ大学キャンパスにある教育人間発達学部

（College of Education & Human Development）の子ども発達研究所（Institute of Child Development）には、附属のラボ・ナーサリースクール（The Shirley G. Moore Laboratory Nursery School／現場の先生たちが「Lab School」と呼んでいたもので以下ラボ・スクール）があり、一九二五年の開設以来、アメリカの保育者養成と子ども研究（Child Study）の中心的役割を果たしてきました。

現在ラボ・スクールでは、二つの保育室で、次のよ

うな四つのクラスが運営されています。

一、週二日（火・金）午前、二〜二・五歳クラス
（グループサイズ十四人）

二、週三日（月・水・金）午前、二・六〜三歳クラス
（グループサイズ十四人）

三、週五日午前、三〜五歳クラス（グループサイズ
十八〜二十人）

四、週三日（月・水・木）午後、三〜五歳クラス
（グループサイズ十八〜二十人）

保育時間は午前クラスが八時半から十一時半、午後
クラスが十二時半から三時半です。

ラボ・スクールのスタッフは、管理職も含め全員で
八〜九人でしたが、同じ保育時間内には多くても二ク
ラスだけの保育であり、子どものグループサイズへの
配慮もあるため、あわただしいことはありません。し

かも、二歳クラスに関しては、親と保育者（teacher）
双方が、子どもが一人でいても大丈夫だと判断するま
で、親が保育室に残ることを求めていますし、常に保
育実習生（student teacher）も保育の場にいる状況で
す。保育者の対子ども人数としては、日本よりはるか
に恵まれた保育環境といえます。

しかも、

ラボ・スク
ールの園庭
には、リス
が走りまわ
る高くて大
きな木々や、
手押しポン
プで水流の
楽しめる、
「Frog and



▲写真2：がまくんとかえるくんの流れ

Toad's Stream (がまぐんとかえるくんの流れ)」の沢、また、長い冬の間は雪のそりすべり場になるという芝生の坂などがありました。私は、初秋の園庭をラボ・スクールの教育専門 (Education Specialist) であるアン・カールソンさんと歩きながら、お茶の水女子大学附属幼稚園の「お庭」や「お山」を思い出ししました。子どもが自分から外に出ていきたくなる「自然」が、保育者の保育を楽しむ視点に支えられ守られている様子に、同じような保育の場の雰囲気を感じたのかもしれません。

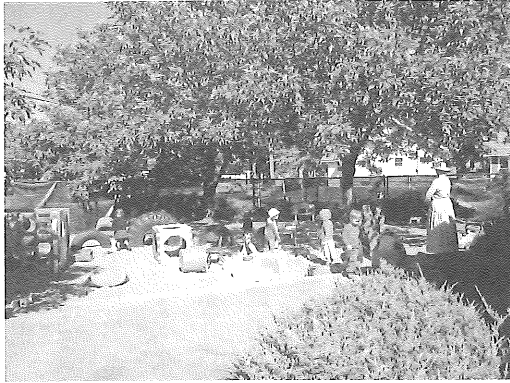
授業料は年間二千ドルから四千五百ドル (日本円で二十万から五十万円程度) とやや高めで、保育時間の短さも合わせて考えると、ラボ・スクールは中・上階層の家庭を中心に利用されているものと考えられました。実際、私が訪問したときには、アフリカ系の父親が一歳前後の息子さんを連れて見学に来ていましたが、すらすらとして身なりのよい彼がフランス語まじり

の英語で話すと、フランス語を披露したい子連れの母親たちも集まってきたて、おしゃべりの輪が広がっていました。アメリカ人が外国語 (しかもフランス語) をしゃべり、他地域の子育て文化に興味を示す場に居合わせた私は、正直、「ここはかなり意識が高い感じだな」と思いました。

もちろん、こうした子育てのネットワークがあることはとても重要です。多人種多民族国家アメリカでは、必要不可欠な人と人とのつながりでしょう。ただ、こうした人の輪を「さすがアメリカだな」と思う反面、貧困層の困難を含むアメリカ社会における保育実践や保育研究に、このラボ・スクールがどのような役割を果たしているのか見え難い、という感じもまたぬぐいきれませんでした。

ミネソタ大学のチャイルドセンター

ミネソタ大学キャンパス内には、さきほどのラボ・



▲写真3：チャイルドセンターの園庭あそび

スクールと同じ教育人間発達学部に属するミネソタ大学チャイルドケアセンター (University of Minnesota Child Care Center / 以下チャイルドセンター) があります。このチャイルドセンターは、大学の教員、職員、学生など大学関係者のための保育の場（いわゆる職場保育所）として一九七四年に開設されました。

私が訪問したとき、
ちようど、
産後間もない
産休中の
チャイルド
センターの
保育者が、
産まれたばかりのわが
子連れ

チャイルドセンターに立ち寄っていました。教育コーディネーター (Education Coordinator) のシェリリン・ゴールドスミスさんは、私を案内しながら、「私も（この赤ちゃんに）初めて会うのよ」とうれしそうに、小さな赤ちゃんを抱っこしていました。

保育者が、わが子連れで行きたくなる職場であることの意味は、けっして小さくないでしょう。お母さんになった若い保育者が、シェリリンさんほか年配のスタッフを頼り、チャイルドセンターを自分の生きる生活の舞台にしていることが伝わってきました。保育学生、新米の保育者などの若手保育者には、子どもたちが日々育つていく保育の場でこそ学べる何かがあることを、私たちは長く語り合いました。保育・幼児教育課程の学生だけでなく、さまざまな学部の学生を実習生 (student practitioner) として受け入れ、スタッフの一員にしていくなチャイルドセンターでは、その学生の専攻が文化人類学であれ生物学であれ、子どもと

共にあることを楽しむ人であれば、保育を共につくっていくことができる、ということでした。

チャイルドセンターには、現在乳児期十八人 (infant / 三〜十六か月)、よちよち歩き期五十四人 (toddler / 十六〜三十三か月)、幼児期六十八人 (preschool / 三十三か月〜就学前) の三つのグループがあり、全体で一四〇人の子どもがいます。開園時間は朝七時半から夕方六時まで。入園希望者の待ちリストはとても長く、いつもチャイルドセンターに入りたい人の数が入園可能人数を上回っています。この「待ち機児」の待ち期間は、平均して一年半にもなってしまふ、とのことでした。

保育料は世帯所得が考慮される傾斜料金 (sliding fee) がとられ、高所得世帯 (High)、ミドル所得世帯 (Middle)、低所得世帯 (Reduced) の三段階になっています。たとえば、終日保育 (full time) の場合、高所得世帯で一か月乳児は千二百六十ドル (約十三万

円)、幼児は千二十ドル (約十万円) の保育料です。

これが低所得世帯ならば、乳児九百八十ドル (約十万円)、幼児七百七十六ドル (約七万五千円) となります。全保育運営費の八割を親の保育料で賄うため、日本に比べて、アメリカの保育料はかなり高めです。それでもなお、このチャイルドセンターでは、日本の保育所やヨーロッパの保育制度に見られる「応能負担」、つまり世帯所得に応じた傾斜をつけた保育料徴収の仕組みが採られていました。これは、アメリカの保育制度から見れば特異なことといえるかもしれません。

というのも、ご存知のようにアメリカの保育制度は玉石混交、多元性をその特徴としています。なぜなら児童福祉法などを根拠にした全ての子どもに対する国による保育の保障が、制度的には整えられてこなかったからです。自助努力を社会福祉の基本にする政策の中、保育制度もその例外ではなく、自分で子どもを育

てられないと判断される場合（低所得、障碍などの
ニーディNeedy）にのみ、公的な保育の保障は適応
されてきました。ですから、ニーディとは判断されな
いごく一般的な子どもの場合、アメリカの保育料は保
育を利用する人がその益に対して同一の料金を負担す
る「応益負担」原則が貫かれてきました。先に見たよ
うに、ラボ・スクールもその原則にのっとっていまし
た。でもチャイルドセンターでは「応能負担」がとら
れている、ということです。

キャンパスにある二つの保育の場

このように、ミネソタ大学内には、歴史や役割の異
なる二つの保育の場があります。これは、お茶の水女
子大学（以下、お茶大）に現在ある、附属幼稚園と附
属ナーサリーによく似た保育の場だと考えられます。

つまり、一方には、大学研究者との共同研究の蓄積
をもち、国の保育実践研究の拠点として期待されてき

た歴史のあるラボ・スクールと附属幼稚園があり、も
う一方には、生活者としての大学人（大学内で働いた
り学んだりする人）を支える仕組みとして保育の場が
拓かれ、大学の研究や保育者養成とのつながりをつ
くってきたチャイルドセンターと附属ナーサリーがあ
ります。

総合大学
という自治
組織の場
で、二つの
保育の場が
それぞれの
大学で生成
しているこ
とは、保育
思想の文脈
から考えて



▲写真4：2歳児クラスの保育室の様子

も、保育制度として考えてみても、興味深いことではないかと改めて考えさせられました。大学という、ある意味特殊な生活空間でさえも保育の場が二通り用意されること、また、社会福祉制度の国家的枠組みが異なる中でもよく似た二つの保育の場が生成していること、この、「二つある」ということの意味は、簡単に「三元化」とくくってしまったば済むようなことではなく、保育研究の大事なテーマだと思います。

ミネソタ大とお茶大のつながり

第二次世界大戦中に兵役を経験し、戦後、お茶の水女子大学(以下、お茶大)の講師となった津守眞氏が、終戦から間もない一九五一年から一九五三年にアメリカのミネソタ大学へ留学し保育・幼児教育を学んだことは、本誌上でたびたび報告されてきました¹。津守氏の留学先がミネソタ大学であったことと、今回の私の訪問先がミネソタであったことはまったくの偶然なの

ですが(今回の私の渡米目的は中等教育段階の市民教育実践を調査することでした)、ミネソタ大学へ行き、二つの保育の場を訪問して考えたことの多くは、津守氏がミネソタ大留学の後に、お茶大で行った保育実践や保育研究の意味や、そうした日本の保育の実践や研究とのつながりの中に見えてくるアメリカの保育・教育思想の変遷でした。

とりわけ、保育・幼児教育の場を「子どもの遊ぶ場」とする思想の変遷については、倉橋惣三以来の本誌の変遷にもかかわる大事な考察点だと思われれます。

『「幼児の教育」誌、つまり本誌は、…(中略)…軍部の批判の対象となることはなかった。このようなことから、戦後になって、倉橋の戦時中の言動が批判されたことがあった。…(中略)…倉橋には、守らねばならないものがあつた。フレーベルが説き、米国の進歩主義教育が主張したこと、幼稚園を幼児の遊ぶ場と

するためには、あらゆることに辛抱を重ねなければならぬ、ある点では周囲と妥協もせねばならないという倉橋の決意によるものだったと私は思っている。倉橋は遊びを中心とする幼児の生活の流れを東京女高師付属幼稚園で守り通した。そのために…（中略）…米國教育使節団は、小学校以上の教育には厳しい批判をしたにも拘わらず、女高師付属幼稚園を訪れたときにはきわめて好意的な觀察をし、「日本の幼稚園は米國のそれとあまり違いはありません」（『幼児の教育』第四十五卷第二号、日本幼稚園協会、一九四六年十二月）と報告している。²」

お茶大とミネソタ大の保育思想のつながり、そして子どもの遊ぶ姿の中にこそ保育研究があることを主張し続けてきた津守氏のこのような言明については、継続して考えていきたいと思っています。

（お茶の水女子大学 幼保プロジェクト 専任講師）

*本研究は、平成十八～二〇年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「グローバル化・ポスト産業化社会における教育社会学の理論的基盤の再構築に関する研究」（研究代表者・広田照幸、課題番号・一八八三〇一七六）による研究成果の一部である。

註

1. 一九五二年六月から一九五三年八月の間に書かれた「アメリカ通信」では、ミネソタ大学のゼミやアメリカの生活の様子が海を越えて報告されていた。近年では、『幼児の教育』第九十八卷第十一号（一九九九年十一月）（第一〇〇卷第十二号（二〇〇一年十二月）までの連載「私が幼児教育を志した頃」に詳しく述べられている。

2. 津守真「私が幼児教育を志した頃（?）」『幼児の教育』第九十九卷第五号、日本幼稚園協会、二〇〇〇年五月、十五頁